

夏期講習だより

第2号

文責 原 洋平（箕輪中学校）

5月19日（月） 第1回 夏期講習事前読み合わせ会報告

第1回読み合わせ 令和7年5月19日（月）

読み合わせ範囲 「西田哲学選集」第一巻 「西田幾多郎による西田哲学入門」 第二部「善の研究」
「第一編 純粹経験」（第一章 純粹経験） 「第二編 實在」（第一章 考究の出立点）

司会者：小林 千景先生（宮田小学校） レポーター：鈴木 義和先生（南箕輪小学校）

【鈴木 義和先生レポートから】

1. はじめに

哲学研修に参加するにあたり、まず哲学の定義が曖昧であった。何をもって哲学なのか、何について研修を受けていくのかも分からず、研修に参加しても分からないままに終わってしまうのではという不安を抱えながらのスタートである。そこで、手始めに本や広辞苑、ネットで哲学について簡単に調べることから始めた。そこから哲学とは、「あらゆる物事に対して問いを立てながら突き詰めて理解していこうとする学問」であると自分なりに解釈し、善の研究と向き合うこととなった。

2. 純粹経験とは

純粹経験とは、個人的な過去の経験則による思いや考え、様々な知識や思想、俯瞰的な意識などの付加価値的なもの全てが加わる前の単純な経験なのではと考える。何かに無我夢中になったときに得られる衝撃的な経験を純粹経験と呼び、それは強く心に残るものであると伝えたいのではないかと。自分の言葉で純粹経験を説明するのであれば、夢中になったり没頭したりする経験のことを言うのではと考える。

3. 経験の積み重ね

夢中になったり、没頭したりする経験のことを純粹経験というのであれば、同じようなことを何度も経験し続けていった先は、純粹経験にならないのではないかと推測できる。しかし読み進めると、そうでもないような印象を受けた。「始めは意識的であった事もこれに熟するに従って無意識となる」というように、何度も何度も繰り返し経験していくことで無意識的に行動ができるようになるという。漢字を覚え、意識しないで活用することや、足し算・引き算などの計算についても繰り返しの学習で身につけることができる。経験の積み重ねの大切さは、身近な学習に置き換えても理解できる大切なものである。

4. 教育における純粹経験

純粹経験は心に大きな衝撃を与え、その後の成長において少なからず影響を与えていくのではないかと。6学年の担任をしていた時に、総合的な学習の時間でにわとりを育てたことがある。卵にひびが入り始めた時、学級の中で一番ににわとりを育てたいと言っていた男児が一言も発せず卵を食い入るように見つめ、ひよこが出てくるまで見守る姿があった。男児は活動の最後に「この経験は多分一生忘れることはない」と学習カードに記していた。男児にとってこの一連の経験が純粹経験であり、先の人生において大きな意味を持ってくれるものだと思っている。

5. おわりに

無我夢中になれる経験というのはなかなかあるものではないが、子どもたちが目を輝かせるもの、体を動かし没頭できる場面を用意することが、学校現場で働く教師の役割なのではないかと感じた。

【グループ討議のまとめ】

* Aグループ

よく分からないということがよく分かった。モヤモヤするものをみんなで話し合うことが楽しいと感じることができた。私たちはどうしても教科の見方であったり、考え方であったり、事実であったり、思いであったり、いろいろな気持ちであったりを通して物事を見ていきがちだが、そうではなくて、何か目の前にあるもの、触れ合っているもの、言葉にできない心の動きということが純粋な経験として価値のあることだということを感じた。そういった視点で日頃から接している子どもたちの姿を見直したいということが話題となった。

* Bグループ

まずは哲学って難しい、哲学って、純粋経験って何だろうというところから話が進んだ。鈴木先生のレポートにもあったように、生き物を育てる経験などで子どもたちがワーンと反応するような印象に残る場面というのが、ある意味純粋経験なのではないか。また、「この曲は感動するよ」と言われたものではなくて、曲を聞いて純粋にいいなと思う場面が純粋経験なのではないかという話も出た。理屈ではなく、子どもたちが純粋にいいな、感動したと思える機会をつくっていくことが大事であると感じた。

また、善の研究について多くの先生方で考える機会を通して、自分たちの営みを一つ一つ捉え直し、振り返ることが大切ではないかということが話題になった。

* Cグループ

鈴木先生のレポートにあるように、無我夢中の状態であったり、積み重ねていくことで無意識になっていったりすることも純粋経験であるだろうという捉えについては共感する先生が多かった。そこから教師として何ができるのかということが話題となり、探究的な活動を行うことは純粋経験の場を用意することになるのではないかと、子どもにとって価値のある活動の場となるのではないかという話が出た。

孵化に立ち会った男児の記述は、ある意味教師が無理やり言語化させているのかもしれないが、それが次の純粋経験につながったり、積み重ねにつながったりしていくのではないかという意見もあった。

また、教師として純粋経験の場を子どもたちに用意することは大切なことの一つであるが、教師自身も純粋経験を増やしていけるような意識も大切であると感じた。

【唐澤 正吉先生より】

- ・ P80の「経験するというのは事実そのままに知るの意である」とP116の「ただありのままの事実を知るのである」という部分は響き合っている。ここで言っている直覚というのは純粋経験のこと。ただありのままの事実を知る、つまり「子どもたちを知る」ということをぜひ考えてもらいたい。
- ・ 鈴木先生のレポート、よく考えて書いてくれたと思う。純粋経験は言葉に表せないが、無我夢中、没頭という言葉は、周りや人のことを考えないでというマイナスの意味もある。純粋経験を表す言葉として本当によいかと考えるとところだが、いいところを捉えていると思う。
- ・ 言葉では表せない思いが伝わっていくような場。これが西田哲学の神髄。それを情意と西田は言っている。これが大切。
- ・ 主客未分、最初に経験すること。熟達していけば、主客がすでに未分。つまり意識しないで動かせるようになってくること。運転とか自転車とか。要するにコツを会得する段階の知的直観という部分も一緒に純粋経験と言っている。思惟、意志、知的直観と言っているように純粋経験の段階もいろいろある。
- ・ 私たちの生活は純粋経験で成り立っている。ただ、私たちの感覚が研ぎ済まされていないだけ。
- ・ 教師として子どもたちに純粋経験をさせたいということも大切だが、教師としての純粋経験とは何であろうかということも考えてほしい。
- ・ レポートの終わりに「子どもたちが目を輝かせるもの、体を動かし没頭できる場面を用意すること…」と書いてくれてある。場面が大事。授業も最初の3分。そこにつながる。この場面を考えることが教師としての役割。予想外の子どもの反応にどう対応できるか、その時に教師の底力が試される。自分を磨かない限り、対応できない。信頼関係を築く一言がでない。
- ・ 西田哲学は日常。哲学者のためのものではない。人々が人生について考えるために書かれたもの。